

鹿大のチカラ

KAGOSHIMA UNIVERSITY

医学部

「弱いまひの患者さんなら、ここまで動かしませう」。そう言いながら、寝かせた相手に腕を上げさせる。右手で相手の腕を持って動きを助け、左手は肩にあて、動かす前に軽くポンとたたき、リズムカルに何度も。

診察時間が終わった医学部付属病院霧島リハビリテーションセンター（霧島市）。センター長の川平和美教授（リハビリテーション）は、研修に来ている作業療法士や理学療法士を相手に、実際に体を動かしてリハビリ法を教える。「川平法」

川平 和美 教授(62)



リハビリ促進回復療法

治療の対象になるのは、脳卒中などで体の半分が動かない半身不随になった患者たちが中心だ。以前は、脳の神経細胞が破壊され、治療しても回復しないという考え方が主流だった。しかし最近、脳が損傷しても、他の部位が変化してその役割を代行する能力があることがわかってきている。

変化を引き起こすには、まひで動かすづらい手足を繰り返し動かす必要がある。ただ、患者本人の力だけでは、意図する場所を何度も動かすのは難しい。そこで、治療者の手でその動きを助けるのが促進回復療法（川平法）だ。

脳卒中まひ回復に成果

指を伸ばす川平法の手技をやってみせる



例えば手の指。患者の人さし指を折り曲げ、伸ばしてもらおう。治療者は動きに合わせ指の付け根や指の側面をさわり、患者が指が動かしやすくなるような刺激を与える。患者が指を動かそうと意思を持ち、実際に何度も動かすことが、脳が変わるために重要だという。

入院患者の協力を受け比較したところ、川平法を実践してい

る期間と、通常の作業療法しかしていない期間では、回復のペースが大きく変わったという。川平教授は「脳卒中によるまひについて、新しい治療法を開発して成果をあげているという点では世界一じゃないかな」と笑顔を見せる。

大学を卒業して3年後に現在のセンターの前身、医学部付属病院霧島分院の助手になった。

循環器内科を専門にしようと思ったが、人手が少ない分院ではもう一人のスタッフと50人の入院患者のリハビリにあたらなくてはならなかった。患者と向き合い、「少しでも効果のある治療法を」と模索するなかで川平法にたどりついた。京大霊長類研究所や米国の国立衛生研究所に留学して得た最新の脳科学の知識と、数千人の患者の体に触れてリハビリを助けた実践が結びついている。

多くの治療者に川平法を知っ

てもらおうと、年間100人前後の研修生を受け入れる。全国各地でも講習会を開いている。相手に手技を施したり、映像を見せたりしながら教える。手技だけではない。同じ効果を狙って、電気刺激や振動を与えながらのリハビリについても、鹿大の研究者と共同で取り組む。

手技によるリハビリは治療者の負担も大きく、そう多くはできない。もし刺激を与えるリハビリ装置ができれば、患者は好きな時にリハビリに取り組み、より回復につながる。今は、磁気の活用も研究しているという。

「使えるものは何でも利用するんです。従来のリハビリは人力飛行機のようなもの。僕らがする促進回復でようやくプロペラ機。電気や振動を使ったりリハビリ装置まできてはじめてジェット機なんです」（星賀享弘）